

サラ・ロイ

Sara Roy

岡真理 十小田切拓 十早尾貴紀 編訳

なよせ  
なよか  
ガガザ

パレスチナの分断、

孤立化、反開発

# な の か が な ぜ

サラ・ロイ

Sara Roy

岡真理

+

小田切 祐

+

早稲川 純

監

パレスチナの分断、孤立化、展開

007309658

302.28  
51

# ななせ ガザ のか

サラ・ロイ

Sara Roy

岡真理

+

小田切拓

+

早尾貴紀

編訳

パレスチナの分断、孤立化、反開発

青土社

横浜市立大学学術情報センター

007309658

貸入

序文 サラ・ロイ 33

第1章 反開発の完了——ガザ地区を生存不可能にする サラ・ロイ 39

一〇・七とは何だったのか 小田切拓 163

第2章 ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察 サラ・ロイ 195

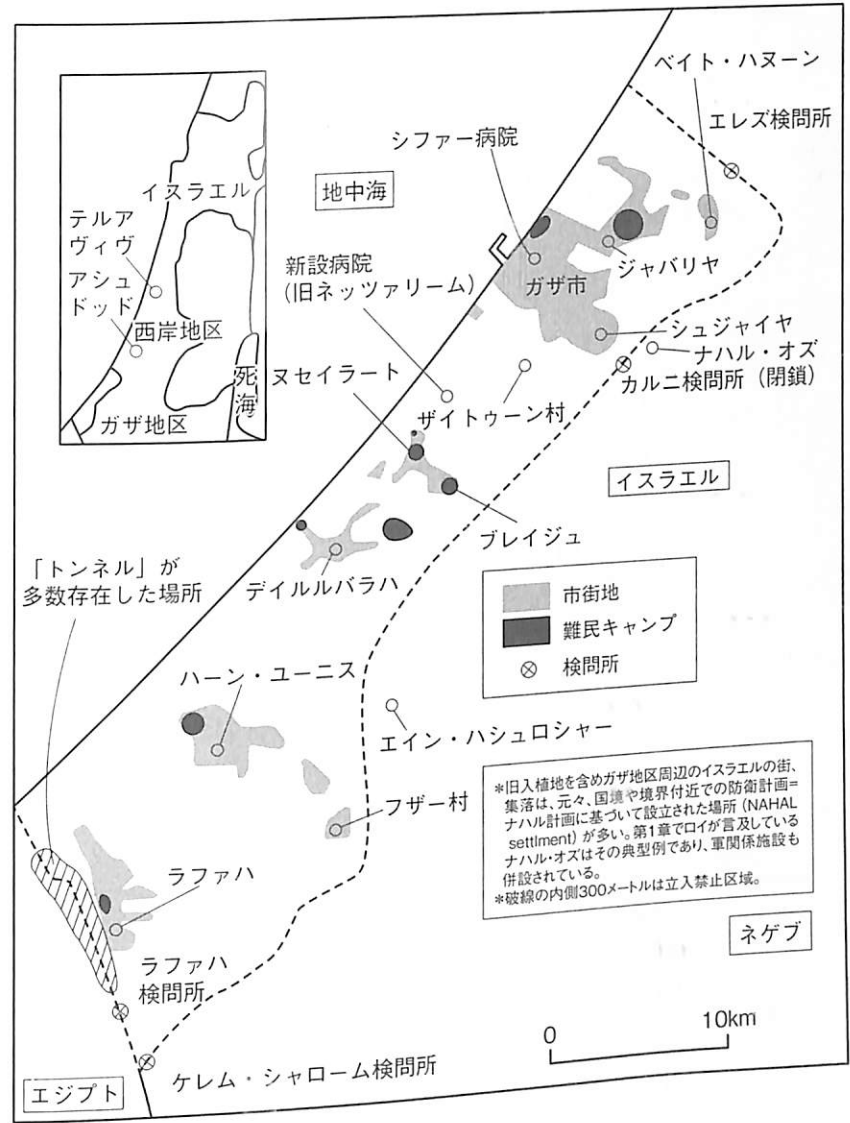
シオニズムから見たガザ地区、ガザ地区から見たシオニズム 早尾貫紀 245

第3章 受け入れがたい非在——ガザの例外主義に対抗する サラ・ロイ 269

もし、この子たちが生き延びて…… 岡真理 307

あとがき 319

なぜガザなのか パレスチナの分断、孤立化、反開発



序論——本書の位置づけと概要

1、本書収録の翻訳論考およびサラ・ロイ『ガザ地区』第二版まで

この日本語版の論集は、ガザ地区研究者であるサラ・ロイ氏（以下敬称略）の主著『ガザ地区——反開発の政治経済学』増補第三版（二〇一六年<sup>\*</sup>）の増補部分の翻訳を中心として編訳・解説をしたものであり、二〇〇九年に編訳刊行した『ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学』<sup>\*</sup>の続編にあたる。第三版で増補されたのは、二〇一四年のイスラエルによる大規模なガザ攻撃「境界防衛作戦」の直前に書かれた「反開発の完了——ガザ地区を生存不可能にする（『ガザ地区』第三版への序論）」と、同攻撃を挟んで一五年に書かれた「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察（『ガザ地区』第三版あとがき）」の二本だ。

また、この増補分の翻訳を中心とした本書の計画を進めている最中の一九年に、ロイの書き下ろしとなる「受け入れがたい非在——ガザの例外主義に対抗する」を本書のために書き下ろしたというところで著者本人から受け取った。この論考は、のちの二一年にロイの単行本『ガザを沈黙させない——抵抗についての考察』の最終章として加筆されたうえで収録、発表されることとなった。<sup>\*</sup>

本書は、ロイの三本の論考を翻訳しつつ、その翻訳者三人がそれぞれに考察を加えるものである。

早尾貴紀

ロイ「ガザ地区」の第二版が刊行されたのが二〇〇一年、つまりパレスチナの第二次インティファダ開始翌年のことであり、今回の第三版の増補部分はおもにこれ以降のガザ地区をめぐる政策や状況の変化を分析している(ヨルダン川西岸地区への占領政策とももちろん連動している)。〇一年以降ということは、〇二年からの西岸地区への隔離壁建設、〇五年のイスラエル軍・入植地の「一方的撤退」、〇六年のパレスチナ議会選挙でのハマース勝利、そこから〇七年にかけてのハマースとファタハ(PLO主流派であり旧来のパレスチナ自治政府の中心政党)との内戦、〇八年二月から〇九年一月にかけてのイスラエル軍によるガザ侵攻「鑄られた鉛作戦」、一二年のガザ攻撃「防衛の柱作戦」、そして一四年の「境界防衛作戦」などの出来事を経た変化がふまえられている。さらに一九年の書き下ろし論考では、その前年の一八年、つまりイスラエル建国後パレスチナの「ナクバ(破壊)」から七〇年に起きた出来事、つまりガザ地区の「帰還の不行進」とそれに対するイスラエル軍の弾圧、アメリカ合衆国(当時ドナルド・トランプ政権)による在イスラエル大使館のエルサレム移転や入植地・占領地のイスラエル領承認などまでがふまえられている。

すなわち本書収録の三論考は、それぞれ一四年、一五年、一九年と、いずれも二三年一〇月七日のガザ地区蜂起以降にイスラエルの対ガザ地区政策が破壊の度合いを数段上げてくる前に執筆されたものである。したがって、(一〇・七)ガザ蜂起以降の現在に至る破壊の惨状についての直接的な記述や分析は含まれてはいないが、しかし逆に三論考が「反開発」(De-development)の完了による生存不可能な「Unviable」な状況の創出というプロセスを分析していることで、むしろ(一〇・七)以前から、イスラエルによるガザ地区政策は決定的な深化ないし転換を図っていたということを示

していると言える。現在の破壊の惨状は目を覆うほどであるが、しかしそこにはかり目を奪われてしまうと、かえってガザ問題の本質を見失ってしまうことになりかねない。

ロイ「ガザ地区」第二版までの論旨は「ホロコーストからガザへ」の序章<sup>\*</sup>で紹介しているのでここでは繰り返さないが、二〇〇〇年の第二次インティファダ直前に執筆された第二版への増補部分についてだけ触れておくと、オスロ和平体制が西岸・ガザの占領地にもたらしたのが、パレスチナ自治政府に行政権と治安権を認めるA地区、行政権のみ認めるB地区、どちらもイスラエルが握ったままのC地区(入植地・軍用地)という区分によって、占領地を細分化しながら支配のシステムを綿密化することであった、とロイは整理している。A地区は徹底的にC地区および入植者用道路と検問所によって包囲されており、支配を効率的に行なうシステムが確立した。加えて、オスロ体制が占領地にもたらしたものは、封鎖政策であるとロイは指摘する。労働者や商品の移動を検問所で制限する「一般的封鎖」、占領地に対し一切の人・物の出入りを禁止する「全面封鎖」、占領地内の街や村単位で封鎖し移動を禁止する「内的封鎖」に区分されるが、これによって西岸・ガザの両地区はともに貧困化が進んでいった。

総じて一九六七年からの占領政策そのものがパレスチナの自立した産業発展とアラブ諸国との交易を禁止してイスラエルに困い込んで依存させる「反開発」であったのだが、九三年からのオスロ体制は和平をもたらすどころか、むしろ本質的には反開発の精緻化と徹底であったと言うことができる。それに対するパレスチナ人の抗議、不満の爆発が第二次インティファダであった。

『ガザ地区』第三版の増補部分は先述のように、この第二次インティファダ以降のイスラエルの占領政策の変化と、それにとまなうガザ政策変化に焦点が当てられる。そこで最も大きな出来事は、抵抗運動とそれへの弾圧そのものではない。端的にそれは「西岸地区とガザ地区の分断」である。もちろん西岸とガザとは地理的にイスラエル建国以降ずっと飛び地になっていたわけだが、しかしそれでも政治的には一体のものとして抵抗運動が展開されてきたと言える。しかし、二〇〇五年の「ガザ地区からの一方的撤退」は、この一体性に大きな分断を持ち込む政策であったとロイは言う。第三版への序論「反開発の完了」ではこのように述べられている。

紛争全般の、そしてとりわけガザ地区の決定的な転換点は、二〇〇五年にアリエル・シャロン首相によるガザ地区からのいわゆる一方的撤退によつてもたらされた。この撤退には、イスラエル軍部隊をガザ地区の外側へ配置転換すること、および、イスラエルによるすべてのユダヤ人入植地を撤去することが含まれていたが、イスラエルが主張するように、ガザ地区の境界線と空域と海域と海上アクセスのすべてに対する全面的かつ直接的な管理もまた含まれていた。(…)ガザ地区を、監獄に放り込み、小さなブロックへと縮減させ、西岸地区から切り離すことをもくろんでもいたのだ。このことは逆にイスラエルが西岸地区を事実上併合するのを何らかのかたうで追求していくことを解禁した。(…)その主目的は、パレスチナ内部を分割し、分断し、孤立

させる——住民も経済も政治も——こと、そうすることによつて、あらゆるパレスチナの土地と資源とに対する、直接的(西岸地区)ないし間接的(ガザ地区)な形での、イスラエルによる完全な支配を確保するということである。そしてその究極的な目標は、領土を拡張したイスラエルの範囲でユダヤ人の多数派を維持すること、および、パレスチナ国家建設につながりうるいかなる政治的プロセスをも排除することである\*。

ガザ撤退は、一般に言われるように、コストパフォーマンスから合理的に入植政策の部分的縮小をシャロンが英断した、ということなどでは決してない。むしろオスロ体制のもとで進んでいたパレスチナの細分化と封鎖の延長線上にあり、それを、西岸地区とガザ地区とに対して別々のアプローチをすることによつて、より大胆にパレスチナの無力化、すなわち「反開発」を押し進めようという目論見であるということが、ロイによつて明晰に述べられている。ガザ地区を西岸地区から切り離し孤立化・監獄化することで、それを梃子に西岸地区の細分化とさらに併合まで実質的に狙っているのである。

この一方的撤退政策を進めるなかで、翌二〇〇六年のハマース政権の誕生は必然的でさえあり、むしろイスラエルにとつては好都合でさえあったと言える。必然的というのは、オスロ和平に取り込まれたパレスチナ解放機構(PLO)とその中心組織であるファタハは第二次インティファダを経てすでにパレスチナ民衆の強い批判にさらされており、ファタハがイスラエルへの抵抗ではなくイスラエルとの協力という路線を選んだにもかかわらず、そのイスラエルから相手にされず「一

「一方的」政策を展開されたのでは、PLO・ファタハはその存在意義を根底的に疑われることになってきたからである。好都合というのは、抵抗運動をスローガンに掲げるハマースを西岸地区から引き剥がしてガザ地区に封じ込め、ファタハを西岸地区で子飼いにしておけば、まさに一方的撤退政策が狙っていた西岸とガザの分断、ガザの封鎖と監獄化、それを通じた西岸の細分化と無力化を加速的に実行できるからである。ロイの分析を追っていこう。

実際のところ一方的撤退計画は、占領地をそれぞれ別々の地位をもつ二つの実体へと正式に切り離すことによって、パレスチナの民衆を分断し、家族を分離し、ガザ地区の人びとが福祉や教育を含む種々の行政サービスを受けることを、不可能とまでは言わないが、困難にしたのであった。分断政策は、民族の共同体を破壊するとともに、その政治的統一を破壊することによって、占領体制に対する組織的抵抗をいっそう弱体化させた。(…)事実、ハマースが二〇〇六年の選挙に勝利し二〇〇七年にガザ地区を掌握して以降、イスラエルがガザ地区を西岸地区から切り離して孤立させる政策を実施することは、容易なものとなっていた。この隔離政策は、制度整備や他の開発過程を阻害しただけでなく、二〇〇八年・二〇〇九年および二〇一二年のイスラエルによるガザ攻撃を手助けする重要な要因でもあった。<sup>\*</sup>

ロイはここでは詳述していないが、西岸・ガザの両地区で議会選挙に勝利したハマースについて、イスラエルと米国は敗北したファタハに対してその両地区において武器・弾薬を提供して内部対立

とクーデターを促しつつ、その実、イスラエルは西岸地区でハマースの議員・活動家を一斉逮捕しガザ地区へ追放していたこと(このように西岸とガザの扱いに大きな違いがあること)は指摘しておきたい。すなわち「ガザ地区を実効支配するハマース」は、イスラエルが一方的政策を進めるうえで必要な要素であり、意図的に作り出した存在であるということだ。

この結果、イスラエルのパレスチナ占領政策で、重大な変化が生じる。さらにロイの分析を見ていく。

占領と和平はもはやどちらを取るのかという両立不可能な問題ではなくなってしまった。それどころか、和平が占領の面前で実現しうるのであり、もつとありていに言えば、和平を実現するために占領が必須であるとみなされてさえているのだ。(…)占領のあからさまな常態化は、ガザ地区では異なるかたちを、つまり極端なまでに強圧的なかたちをとる。二〇〇五年のガザ撤退によって、イスラエルはもはやガザを占領していないと主張している。(…)ハマースによる権力掌握の結果、イスラエル・パレスチナ紛争は、ガザ地区を中心として、そしてイスラエルとハマースの敵対関係を中心として、作り替えられたのであった。(…)占領は国際的な正当性をめぐる政治的・法的問題ではなくなり、占領のルールではなく戦争のルールが適用される単純な国境紛争になってしまったのだ。(…)これらの方策は、ハマース体制を倒す(そしてハマースを支持しているガザ住民を罰する)とともに西岸地区のパレスチナ自治政府「ファタハ」を支援する政策の一部として、ガザ地区の経済と生産能力を徐々に衰えさせ滅ぼすために計画的に立案されたもの



である。<sup>＊</sup>

まさに二〇二三年一〇月以降に激化したイスラエルによるガザ地区の攻撃と西岸地区の無力化のロジックが余すところなく語られている。ロイはこう続ける。「占領」が分析的・法的な枠組みとして時代遅れのものとなってきたことで、(…)ヨルダン川西岸地区について言えば、占領の継続から、完全な併合および統治の強制へ、ガザ地区について言えば、占領の継続から、隔離と無能化へ」という決定的な転換がもたらされた、と。<sup>＊</sup>ガザ地区攻撃の悲惨さの陰で、西岸地区における暴力は過去最悪レベルとなり、イスラエルの軍・治安警察・入植者による家屋破壊、逮捕拘留、焼き討ち、暴行虐殺、収奪は西岸全土に日常的になっているが、それでもファタハの自治政府は、足下の事態についてさえ看過するばかりである。そしてその事態の展開は、〇五〜〇七年のイスラエルの政策の洞察から見通すことができるのだ。

### 3、欧米・日本・国連の共犯性

このイスラエルによる占領政策の深化に対して、国際社会、とりわけ欧米・日本はどのように対応してきたのかを見ておく。根本的にはオスロ体制という国際的な枠組みに規定されている以上、欧米・日本は、オスロ合意の破棄を訴えているハマース政権をいかなるかたちでも承認しなかった。二〇〇六年一月の選挙結果を受けて、同三月にハマース政権が発足したが、イスラエルおよび欧米

諸国、日本は同政権をボイコットし和平交渉が頓挫、イスラエルは先述のように米国とともにファタハを軍事支援して内戦を煽り、選挙結果を無視してハマース政権の転覆を促した。事態を打開すべく、パレスチナの側はハマースとファタハが連立交渉を重ねて〇七年三月に連立内閣を発足させたが、それはパレスチナの政治的分断を回避しつつ、国際的に承認されているPLO主導の自治政府を担ったファタハを加えることで、国際的な交渉のテーブルを開くための選択だった。しかし、連立の一部としてあれハマースが入っていることを断固としてイスラエルや米国は認めず、ファタハへの軍事支援をさらに強化し、同年六月には最終的に西岸地区をファタハに掌握させた一方、ガザ地区についてはハマースが制圧することとなった。

これ以降ガザ地区が西岸地区とは「異なる政体」であるとして分離・孤立させられ継続的な封鎖と攻撃の対象となることについては、先にロイの分析で見たとおりだ(〇八年からの数次にわたる大規模なイスラエルの軍事作戦はこの延長にある)。このガザハマース、西岸ハファタハという地理的かつ政治的な二重の分断構図は、欧米・日本も関与した国際的な共謀のもとで成立したと言える。そして再度、二〇一四年六月の二度目のハマースとファタハによる連立内閣の発足とその翌七月のイスラエルによる大規模なガザ侵攻「境界防衛作戦」で連立内閣を潰すということが反復された(このときは二二〇〇人以上のガザ住民が殺害されるなどの甚大な被害が出たが、これについては本書の「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察(「ガザ地区」第三版あとがき)」を参照)。確認されるべきは、ハマースとファタハ(の一部)が、連立内閣によって、パレスチナの政体が分断されないようにすること、および、あくまで国際的な政治交渉によって状況の打開を図ろうとしていたという点だ。その連立政

権を承認しなかったのが欧米・日本であり、軍力で潰したのがイスラエルだ。それによってガザ  
ハマス、西岸IIファタハという分断体制を強引に維持させ、反抗的なガザ地区のハマスを、  
従順な西岸のファタハから完全に分離させ、ガザ地区を封鎖攻撃の標的とし続けることで、それを  
見せしめに西岸をより従属させ無力化させているのだ。

折しも二〇〇六年、日本政府はまさにハマースとファタハとの内戦が煽られているさなかに、  
「平和と繁栄の回廊」構想を発表した。これは外務省によると、「日本、パレスチナ、イスラエル、  
ヨルダンの四者による地域協力によりヨルダン渓谷の社会経済開発を進め、パレスチナの経済的自  
立を促す中長期的取組」と定義されている\*。つまり、オスロ体制の枠組みのもとでの「和平」のた  
めに、軍事占領者であるイスラエルとの協力で被占領地で経済支援をするというプロジェクトなの  
だが、その説明のなかには「占領」の文字はまったくない。西岸地区が国際法的に「占領」状態であ  
ること、占領者が被占領地の生活や経済に介入することは現状維持を義務づけた国際法に違反す  
ること、つまり占領が不当で終わらせなければならないということが、一言も触れられていないの  
だ。ロイが先に「占領」の言葉が消えて、占領が常態化していると語っていたが、この構想はその  
ことに加担していると言える。イスラエル政府・企業を占領経済に組み込むことが、パレスチナの  
「自立を促す」ところかその真逆で、つまり「反開発」の推進になるということが、日本政府には  
まるで理解されていない。このことについては、前著『ホロコーストからガザへ』で小田切拓  
「対テロ戦争」と二つの回廊」が詳しく論じている\*。

最後に国際連合がイスラエルによるガザ地区封鎖に果たした負の役割に触れておく。ロイは「ガ  
ザ地区に対する数々の戦争に対する一考察（「ガザ地区」第三版あとがき）」において、二〇一四年に国  
連がガザ復興に関してまとめた二つの文書について、イスラエルによるガザ封鎖を容認するものだ  
と問題視し、「ガザ地区」第三版の巻末資料に全文掲載している。一つが「ガザ復興の仕組み」\*  
で、  
国連使節、イスラエル政府、ファタハ自治政府とで調整された。その内容は、最優先事項として  
「イスラエル政府の安全を保障すること」としたうえで、具体的な復興事業に触れている。もう一  
つの文書が「資材監視プロジェクト」\*  
で、これは国連中東特別調整官事務所（UNSCO）が主導し  
たものだ。その主眼もやはりイスラエルの安全保障であり、ガザ地区に搬入される資材がパレスチ  
ナの武装勢力に使われないよう「監視」の仕組みを定めている。だがロイによると、この二つの文  
書の本質はこうだ。

実際に整備が進められている恒久的で手続きが複雑な許可証および管理システムは、イスラエル  
当局の完全管理下にあるヨルダン川西岸地区のエリアC（警察権・行政権ともにイスラエル側にある）  
という場所で導入されている制度と、同じものである。事業内容と実施場所については、全てイ  
スラエルの承認を得ることが必要であること。安全保障上の懸念があれば、イスラエルは行程上  
のどういった内容についても拒否できること。おそらくこれが最重要事項なのだ。（…）一方で、  
次の状況が想定される。ガザ地区の封鎖状態が維持されるだけでなく、国連が実質的にその責任  
を負うようになるのだ。つまり、イスラエルがその行程の全体を完全に掌握した上で、それを監  
視する役割を国連が担うのだ\*。

すなわち、ガザ地区に搬入できる物資の種類と量はすべてイスラエルの許可が必要であり、そのことを国連が認めているということであり、事実上ガザ地区の封鎖さえも容認しているということになる。二〇二三年一月以降のガザ攻撃には、食糧・医療品・燃料をはじめあらゆるものの搬入が著しく制限され飢餓・餓死まで発生したが、それに対して国連が声高に非難はしても、実効性のある介入ができないのはこのためだ。国連はイスラエルにガザ地区を封鎖する権限を与えてきたのであり、封鎖の結果生じる諸問題について責任を負っているのである。

#### 4、人道援助から占領終結へ

さてロイは、本書収録の増補論考で、繰り返し、ガザ地区における反開発が完了し、もはや「生存不可能」な状況が創出されたということを描いている。占領の問題が隠蔽され、自立的な生産と流通に関わるすべての活動を阻害された先にあるのは、「人道問題」へのすり替えである。ガザ地区は最大限善意の人びと、善意の各国政府によって、すっかり国際援助、人道支援の拠点となってしまった。率先してイスラエルによる占領のコストの肩代わりをしているのであるが、このことによつてますます「占領」の事実は見えなくなる。ロイはこう書いている。

ガザ地区に対して適用されてきたイスラエルの一連の政策の終着点は、イスラエル人と国際社会の一員たちの目に映るパレスチナ人、とくにガザ住民の姿を、彼ら自身の土地にいながら「よそ者」であるかのように変質させることである。すなわち、真の市民はもはや存在しない場所で、いかなる主張もせず、屈服して従属して暮らしている「よそ者」へ変えられたのだ。こうした構成のなかで、パレスチナ人の存在は「人道問題」へと切り下げられた。つまり、窮乏化した飛び地のなかで経済的権利も政治的権利もなく、国際社会の「善意」に依存するしかない、人口数としての存在へと貶められたのだ。パレスチナ人たちは、不必要で使い捨てのもの、取るに足らない存在とされてしまい、慈善の対象かテロリストとして以外はもはやどうでもいいのである。<sup>\*15</sup>

実際第二次インティファダの起きる二〇〇〇年時点でUNRWAの食糧援助を受けるガザ地区住民は八万人未満だった。占領下の反開発政策に晒されていた以上、自立していたとは言えないが、一定の農業や漁業やサービス業があり、イスラエルや海外への出稼ぎやガザ地区内の入植地工業団地での雇用があり、トンネルでの密貿易があったため、援助依存はそこまでの水準ではなかった。それが、農地破壊、インフラ破壊、出漁制限、労働許可削減、出入域規制、入植地撤去（一方的撤退）、トンネル破壊、これらによつて失業率が急上昇し、UNRWAの食糧援助対象者は二〇二二年時点で（つまり二三年からのガザ攻撃以前で）一一〇万人に達していた。<sup>\*16</sup> その他、ひじょうに多くのODAやNGOが、封鎖されて破壊されたガザ地区を崩壊させないために援助を増やし続けざるを得なかった。封鎖と破壊をもたらした占領者であるイスラエル政府が、その援助団体や援助物資がガザに入るのを「テロリスト掃討」という名目で規制・選別するという、きわめて倒錯的な構図に

なっていた。「よそ者」「使い捨て」「慈善の対象」「テロリスト」……。これらの用語は、二〇二三年一〇月以降にさらに顕著になり、公然と語られるようになったが、実際には二〇〇五年の一方的撤退と封鎖以降に人為的に政策的に生み出された語りなのである。

それでは、この倒錯した反開発状況に対してどうすべきなのか。ロイは単純明快に、「イスラエルによる軍事占領の終結」と言い切る。それがすべての具体的な経済活動の基礎となる。第三版の序論「反開発の完了」でロイはこう書いている。

ガザ地区の将来的な生存可能性は、持続可能な経済成長ができることと世界と正常に交流ができることにかかっている。ひるがえってこれが実現するには、いくつかの要因が前提になっているのだが、それらのなかでも重要なのは、イスラエルによる軍事占領の終結である。そのほかの必要条件には次のようなことが含まれる。あらゆる局面におけるイスラエルによる封鎖を解除し、生産能力に対して実質的な投資を行なうこと。地区内取引と国際貿易（とりわけイスラエルおよび西岸地区との貿易）にアクセスできること。ガザ地区からの人間の移動を自由にする（例えば労働者、海外投資家、研究者）。経済的結束を阻害している（コストを上昇させ投資を抑制させている）占領地の分断（ガザ地区と西岸地区との分断）を終わらせ、内政（ハマースとファタハ）を和解させること。教育サービスと医療サービスを改善すること。国際支援の優先順位を「救済」から、国家再建計画の一環として「開発」へと変更すること。<sup>\*</sup>

真つ当で原則的な主張である。占領構造のなかで人道援助をいくら出そうと、イスラエルと経済協力をしようと、すべてはイスラエルの掌の上であり、占領の強化に行きつく。そうではなく、占領そのものを終わらせること、パレスチナに無条件の自由を認めること、これだけが正論である。そしてロイは国際社会の責任にも触れて、こう続ける。「変化はまた海外援助国がイスラエルの政策に対して政治的・経済的に異論を唱える意志にもかかっている」と。反開発の共犯者である援助国が共犯をやめなければ、イスラエルの占領も反開発も終わるはずがない。

しかしここにはパレスチナ人の、ガザ地区住民の主体性への論及が欠けている。これについてロイは、第三版あとがき「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察」の末尾にこう記している。

反開発とそれによってもたらされた損失は、他の多くのプロセスと同じように、政治的な状況が逆方向に働けば、それを反転させることは可能だ。当然ながら反転には数多くの要因が必要なのだ。(…)ガザ地区の住民は犠牲者であると同時に、登場人物<sup>登場人物</sup>、当事者<sup>当事者</sup>である。彼らは数十年にもわたる虐待と剥奪を耐え抜き、何度も再浮上してきた。(…)状況に威圧され、以前よりはるかに多くの人びとがここを去りたいと望むようになってきたが、それでもガザ地区の中には、屈するものかという気持ちとまだ何かできるという気持ち<sup>気持ち</sup>が相互に混じり合って残っている。(…)彼らが、世界の一員になりたいと考えるとき、それは恩恵を受けるだけの存在としてではない。自分自身を立て直すことに対する中心的で重要な役割を担う参加者として扱われなければならないし、彼ら自身もそう扱われることを求めている。ガザ地区の人びとの行為<sup>行為</sup>の主体性は、承

認されるだけでなく、現実に関与していくものなのである。<sup>\*18</sup>

私たちがガザ地区の惨状について、状況を分析し、構造を分析し、その責任をイスラエルや国際社会に問うとき、パレスチナ人を、ガザ地区の民衆を、たんなる客体や犠牲者としてはならない。それでは人道援助と同じくガザ住民を救済対象とみなす構図に陥ってしまう。そうではない、それではない、とロイは強調する。これまでもガザ地区のパレスチナ人は主体的に抵抗運動の中心を担ってきたし、これからもそうだ。インティファダが、帰還の大打進が、(一〇・七)ガザ蜂起が、そうであったように。それゆえ私たちは、イスラエルと国際社会を批判しながらも、行為主体としてのパレスチナ人を、ガザ民衆の行為主体性を、どこまでも尊重する姿勢が必須なのである。占領を揺さぶり転覆させる力はパレスチナに、ガザ地区にあるのだから、とロイは語る。

おわりに

冒頭でも触れたように、本書は、サラ・ロイの三本の論考を翻訳しつつ、その翻訳者三人による考察を加えたものである。三人の顔ぶれは、ロイの日本語版前著『ホロコーストからガザへ』を一五年前に作成したときと同じであり、ロイの仕事に長く敬意を払ってきたことは共通する。だが、それぞれに専門領域を異にしており、おそらく読み方や重きを置くポイントも異なる。岡真理はアラブ文学者、小田切拓はジャーナリスト、早尾貴紀は社会思想史家である。それぞれの観点からロイの読解とガザ問題(イスラエル・シオニズム問題)とを交差させることで、ロイの仕事の意義を引き出したつもりだ。理解を深める一助となれば幸いである。

- \* 1 Sara Roy, *The Gaza Strip: The Political Economy of De-development*, Institute for Palestine Studies, 1995, 2nd ed. 2001, 3rd ed. 2016
- \* 2 サラ・ロイ「ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学」(岡真理+小田切拓+早尾貴紀編訳、青土社、二〇〇九年、新装版二〇二四年)。なお同書ではロイの *The Gaza Strip* の紹介をする際に *Strip* の意味を汲んだ「ガザ回廊」という表記を用いたが、本書においてはより一般に使われている「ガザ地区」と表記することとした。
- \* 3 単行本は、Sara Roy, *Unsilencing Gaza: Reflections on Resistance*, Pluto Press, 2021。論考の原題は、"An Unacceptable Absence: Countering Gaza's Exceptionalism" である。なお本書における訳文は、ロイから受け取った元のバージョンからのものである。
- \* 4 早尾貴紀「序章 ガザ地区とパレスチナ占領の概要およびサラ・ロイの仕事」、ロイ「ホロコーストからガザへ」、一一四〇頁
- \* 5 ロイ「反開発の完了——ガザ地区を生存不可能にする」「ガザ地区」第三版への序論」、本書、四八―五〇頁
- \* 6 同前、五一―五二頁
- \* 7 同前、五五―五六頁
- \* 8 同前、五七頁
- \* 9 外務省ウェブサイト [https://www.mofa.go.jp/mofaj/me\\_a/mel/page25\\_001067.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/me_a/mel/page25_001067.html)
- \* 10 小田切拓「対テロ戦争」と二〇の回廊(ロイ「ホロコーストからガザへ」、一〇九―一六五頁)
- \* 11 ロイ「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察(ガザ地区)第三版あとがき」、本書、二二二―二二六頁
- \* 12 Roy, *The Gaza Strip*, 3rd ed., pp.431-439
- \* 13 *Ibid.*, pp.440-466
- \* 14 ロイ、前掲「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察」、二二四―二二五頁

\* 15 ロイ、前掲「反開発の完了」、六一―六二頁

\* 16 UNRWA, "Gaza 15 years of blockade", <https://www.unrwa.org/gaza15-years-blockade>

\* 17 ロイ、前掲「反開発の完了」、一三二―一三三頁

\* 18 ロイ、前掲「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察」、二三四―二三五頁

補遺——「不都合」な揭示書として

小田切拓

### 反開発とは何か

本書は、恐らく、多くの中東関係者にとって「都合の悪い」書籍である。「ホロコーストからガザへ」以上に、本書はよりロイの専門性に特化した内容になっている。彼女が定義した反開発が、ガザ地区を、くまなく、奥深くまで、浸食している状況を詳述し、その実施主体の責任を明らかにしているのだ。

そもそも開発とは、「機能や能力を発展させる」政策、事業であるはずだ。国際的な枠組みで行なわれる場合は、経済的・社会的問題を抱えた国や地域の現状を変え、その成長や安定化を図る行為となる。もしそれが「発展のための事業」でなければ、定義を変えねばならないはずだ。

ガザ地区で行なわれているのは「開発に必要な社会構造を解体、破壊する」政策や事業だ。これをロイは反開発と定義しているが、ガザ地区では「開発」として実施されている。ポジティブな印象を持つ「開発」という仮面で、問題に「蓋」がされているのだ。

ロイは、国連、援助国、NGO等が反開発の実施主体になっている現状に対し、問題を提起をしている。反開発という用語自体が、「開発」の名を使ったマスキングや、誤魔化しへの警告の意味

\* 1 Rachel Corrie, Emails from Palestine, *Rachel Corrie Foundation for Peace & Justice*, <https://rachelcorriefoundation.org/rachel/emails>

\* 2 *Ibid*

\* 3 古居みずえ「現在がナクバだ 封鎖されたガザで何が起きているか」(インタビュアー・岡真理)、特集「二世紀のアパルトヘイト国家・イスラエル」、『インパクション』165号、二〇一八年。

\* 4 サイード・アブデルワーヘド「ガザ通信」岡真理訳、青土社、二〇〇九年。

\* 5 スヘイル・ハンマード「ガザ」佐藤まな訳、特集「パレスチナ詩アンソロジー・抵抗の声を聴く」、『現代詩手帖』二〇二四年五月号。

\* 6 “No ceasefire without justice for Gazan” *The Electronic Intifada*, 2014/7/24

\* 7 Tareq Hajaj, “Suicide in Gaza,” *Mondowebis*, 2023/10/5

\* 8 Omar Chraieb, “Why I vowed not to have children in Gaza,” *The Electronic Intifada*, 2014/7/22

## あとがき

ガザ地区——パレスチナの中でも「辺境」にあるこのごく小さな土地が、しかしながらパレスチナ問題の「核心」であるとサラ・ロイさんは長年にわたって論じつづけてきた。ガザ地区の成り立ち、パレスチナの抵抗運動の展開、イスラエルの占領政策の変遷、国際社会の共犯的関与。そのすべてが数十年にわたって複雑に折り重なっていった果てに、二〇二三年一〇月七日の〈ガザ蜂起〉があり、それを梃子としたイスラエルによるガザ破壊政策の激化があり、密接に連動したヨルダン川西岸地区における暴力と収奪の加速がある。一〇月七日が始まりでないのはもちろんのこと、ガザ地区に「テロリストがいる」ということが問題なのでもない。サラさんの『ガザ地区』(*The Gaza Strip*)はそのことを余すところなく明晰かつ具体的に論証している。

本書の編訳者である三人(岡真理、小田切拓、早尾貴紀)は、二〇〇八年末―〇九年初めにイスラエルが行なったガザ地区の大規模な封鎖と空爆・侵攻(「鑄られた鉛作戦」)の直後の〇九年三月に、ガザ地区に関する世界で随一の専門家であるサラさんを日本に招聘して、いくつかの講演と対談をしていただいたが、実のところサラさんの招聘を決めたのはその「最初の大規模なガザ攻撃」とされる「鑄られた鉛作戦」を受けてのことではなかった。そのもつと前に、ガザ地区の置かれている錯綜した緊張状態を懸念し、そのことに対する関心と理解を高めるためにと、招聘を決めてサラさ

んの承諾を得て日程を固めていた。当然、〇八年が「最初」の侵攻ではない。〇五年のガザ地区における一方的撤退と封鎖、〇六年のハマース政権の誕生と煽られたファタハとの内戦、〇七年のガザ・西岸の分断体制と、事態の悪化は日に日に進んでいっていた。この後どのような壊滅的な事態が展開されるのかという不安のなかでサラさんに連絡を取ったのだった。

振り返ると、日本の言論界でガザ地区とサラさんに目立った論及がなされるようになったのはこの頃からであった。小田切拓さんが「ガザ——人間の壊し方」という論考を書き、サラさんの「ガザ地区」についても紹介をしたのが、「世界」（岩波書店）の二〇〇四年五月号であり、小田切さんは翌〇五年にも「パレスチナ検証「ガザ撤退」とは何だったのか——「檻」の外から、イスラエルが管理する」を同じく『世界』に発表した。ガザ地区で進行している事態にもっとも早くかつもっとも厳しく目を向けていたと言える。また、岡真理さんがサラさんの「ホロコーストとともに生きる——ホロコースト・サヴァイヴァーの子供の旅路」を翻訳掲載したのが、『みすず』（みすず書房）の二〇〇五年三月号であったが、これが日本語に訳された最初のサラさんの文章であろう。ホロコースト・サヴァイヴァーのユダヤ人であるというサラさんの家族の背景と倫理的思索とが、浩瀚なガザ研究の土台にあるということが広く知られるところとなった。小田切さんの論考と岡さんの翻訳がともに第二次インティファダ後に対ガザ政策が大きな転換を迎える時期に重なるのは、必然的なことだったと言える。

このお二人の助力を得て、早尾が招聘実務者となり〇九年のサラさんの来日講演が実現し、また同年中に私たち三人の編訳・執筆によって、その記録を『ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学』（青土社）として刊行することができた。同書には議論の前提となるサラさんの大著『ガザ地区』の要旨を作成して収録したこともあり、ようやくにしてガザ地区にまつわる諸問題の全貌およびサラさんの研究背景と広がり进行分析する初めての日本語書籍を世に出すことができた。同書はその後のガザ情勢の悪化のなかで必読書として読み継がれていたが、二〇一四年の「境界防衛作戦」や一八年の「帰還の大作進」などを踏まえて、そのかに刊行されたサラさんの『ガザ地区』第三版（二〇一六年）の長大な増補部分である「序論」と「あとがき」だけでも翻訳して解説を加えて刊行すべきではないかという計画が進んだ。一九年には書き下ろしの論考（本書第3章）をサラさんからいただき、私たち三人がそれぞれに一本ずつを翻訳し、また一本ずつ論考を執筆して、第二弾の書籍としようという方向性がまとまった。

そして実のところ、三論考の基本的な翻訳についてはすべて、今回の二三年一〇月のずっと以前には終えていた（おそらく二年前半には訳文の初稿は全員分揃っていたと記憶している）。それにもかかわらず、三人それぞれの多忙さや体調などを言い訳として、最終的な翻訳文の見直しおよび各自の論考の執筆についてはしばらく作業が停止してしまっただけで、この点については、書き下ろしもくださったサラさん、ガザ地区で窮地に置かれている人びと、担当編集者の菱沼達也さん、そして本書を待っている読者のみなさんに、多大なる失礼をしてしまった。各位に深くお詫び申し上げるほかない。二三年一〇月七日の〈ガザ蜂起〉に目を覚まさせられ、ようやく作業を再開したものの、今度は逆にあまりのガザ情勢の悪化とその長期化によって、三人がともに各方面での講演や雑誌記事の執筆など急ぎの依頼仕事で多忙を極めて、またしても本書のための作業時間がじゅうぶんに取れなく



なってしまう。これによる本書刊行のさらなる遅延についても、重ねてお詫び申し上げる次第である。

ガザ地区の破壊に関する日々の陰惨なニュースに心を痛め、一刻も早い刊行をとつねに気持ちを焦らせながら、次々と新たに来るガザ地区関係の仕事の合間を縫って、なんとかここまでたどり着くことができた。この長期にわたる作業プロセスを、企画の立ち上げから最後まで辛抱強く見守り励ましてくださったのは、青土社の菱沼達也さんである。深く感謝申し上げたい。また、仕切り直しの作業途中には、同社の『現代思想』二〇二四年二月号「特集・パレスチナから問う」の刊行があり、岡、小田切、早尾もともに執筆し、本書刊行へと問題意識を繋いでいくことができた。これについては、『現代思想』編集者の塘内彩月さんにもお世話になったことを、感謝とともに記しておく。

本書収録のサラさんの論考の翻訳については、早尾が「反開発の完了——ガザ地区を生存不可能にする（ガザ地区）第三版への序論」を、小田切さんが「ガザ地区に対する数々の戦争に対する一考察（ガザ地区）第三版あとがき」を、岡さんが「受け入れがたい非在——ガザの例外主義に対抗する」を、それぞれ分担した。各訳文の最低限の表記の調整をしたのは早尾である。

\*

ガザ地区の破壊状況は最悪を更新し続けている。イスラエル軍のガザ地区攻撃による、死傷者数、

全半壊家屋数、避難者数、拉致拘束者数、学校・病院・モスク・教会の破壊数など、デジタル化しても次々とその数字は過去のものとなってしまふ。そしてデジタル化できない膨大な破壊・被害が、もはや理解や表現の限界を超えて広がっている。実況中継的にガザ地区内から世界に向けて直接発信され続ける悲惨な状況に対して、しかし世界はその情報を受け止めることなく破壊の進行を傍観・容認してしまっている。ジェノサイドが衆人環視のもとで長期にわたって実行されている時点で、もはや人間理性や人権などといった近代的価値観など破綻してしまっていると言わざるを得ない。そうしたなかで、ガザ地区から住民全員が追放されガザ地区が地図上から抹消され、<sup>エスニック・クレンジング</sup>民族浄化が完成されかねない勢いに、率直に絶望しかけている。

だが、ガザ地区の人びとが協力しあって生存の闘いを続けている以上、また、誰よりも長く誠実にガザの人びとに寄り添ってきたサラさんがたゆまず言論で闘い続けている以上、ガザの苦境に責任を有する日本の私たちが諦め絶望するというのはあまりに勝手な振る舞いだ。私たちは心折れることなく、さらに長い取り組みになることを覚悟して、強靱に思考し発言し続けなければならない。このかんサラさんとのEメールのやり取りの中で、Stay Strong. と励まされた。この言葉とともに、本書を読者に届けたい。

二〇二四年六月

早尾貴紀

本書関連年表

|          |                                  |
|----------|----------------------------------|
| 1947年    | 国連パレスチナ分割決議                      |
| 1948年    | イスラエル建国宣言                        |
| 1949年    | 第一次中東戦争休戦（ガザ地区境界線確定）             |
| 1967年    | 第三次中東戦争（ガザ地区・西岸地区の軍事占領開始）        |
| 1987年    | 第一次インティファダ開始                     |
| 1993年    | オスロ和平合意                          |
| 1994年    | パレスチナ自治政府発足／ガザ地区をフェンスで包囲         |
| 2000年    | 第二次インティファダ開始                     |
| 2002年    | 西岸地区に隔離壁建設開始                     |
| 2005年    | イスラエル軍・入植地をガザ地区から一方的撤退           |
| 2006年    | パレスチナ議会選挙でハマース勝利、政権発足、ファタハと内戦開始  |
| 2007年    | 内戦を経て、西岸地区＝ファタハ支配、ガザ地区＝ハマース支配に分断 |
| 2008-09年 | イスラエルによるガザ地区攻撃「鑄られた鉛作戦」          |
| 2012年    | イスラエルによるガザ地区攻撃「防衛の柱作戦」           |
| 2014年    | イスラエルによるガザ地区攻撃「境界防衛作戦」           |
| 2018年    | ガザ地区で「帰還の大道行進」（～2019年）           |
| 2020年    | アブラハム合意でイスラエルとアラブ3国とが国交樹立        |
| 2023年    | 10月7日ガザ蜂起、イスラエルによるガザ攻撃激化         |

## なぜガザなのか

パレスチナの分断、孤立化、反開発

2024年7月30日 第1刷印刷

2024年8月10日 第1刷発行

著者——サラ・ロイ

編訳者——岡真理+小田切拓+早尾貴紀

発行人——清水一人

発行所——青土社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-29 市瀬ビル

[電話] 03-3291-9831 (編集) 03-3294-7829 (営業)

[振替] 00190-7-192955

印刷・製本——シナノ印刷

装幀——水戸部功

© 2024, Sara ROY, Mari OKA, Hiromu ODAGIRI  
and Takanori HAYAO

Printed in Japan  
ISBN978-4-7917-7663-4

サラ・ロイ Sara Roy

1955年アメリカ生まれ。政治経済学。ハーバード大学中東研究所上級研究員。パレスチナ、とくにイスラエルによるガザ地区の占領問題の政治経済学的研究で世界的に知られる。ホロコースト生き残りのユダヤ人を両親にもつ。主な著書に「ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学」(青土社、2024)、*The Gaza Strip: The Political Economy of De-Development*, Institute for Palestine Studies, 1995 / 2nd ed. 2001 / 3rd ed. 2016. *Failing Peace: Gaza and the Palestinian-Israeli Conflict*, Pluto Press, 2006. *Hamas and Civil Society in Gaza: Engaging the Islamist Social Sector*, Princeton University Press, 2011. *Unsilencing Gaza*, Pluto Press, 2021.

岡真理 (おか・まり)

1960年生まれ。早稲田大学文学学術院教授、京都大学名誉教授。東京外国語大学大学院修士課程修了。在モロッコ日本国大使館専門調査員、大阪女子大学人文社会学部講師、京都大学大学院人間・環境学研究科教授等を経て、現職。専攻は現代アラブ文学、パレスチナ問題。主な著書に「彼女の「正しい」名前とは何か」(青土社)、「椰子の木陰で」(青土社)、「アラブ、祈りとしての文学」(みすず書房)、「ガザに地下鉄が走る日」(みすず書房)、「ガザとは何か」(大和書房)。

小田切拓 (おだぎり・ひろむ)

1968年生まれ。ジャーナリスト。イスラエル/パレスチナを専門に取材し、渡航回数は現在までで70回あまりに及ぶ。取材歴は20年を超え、「ガザ地区」、「隔離壁」、「オスロ合意」や「経済援助による占領加担」についての構造的な分析で知られる。「ガザ 人間の壊し方」「ハマスの6ヶ月 民主主義が瓦解する」「開発学の終焉 パレスチナ支援という虚構」など、「世界」「現代思想」等に約30本の長編論考を寄稿。

早尾貴紀 (はやお・たかのり)

1973年生まれ。東京経済大学教授。専攻は社会思想史。著書に「国ってなんだろう?」(平凡社)、「パレスチナ/イスラエル論」(有志舎)、「希望のディアスポラ 移民・難民をめぐる政治史」(春秋社)、「ユダヤとイスラエルのあいだ」(青土社)。共編書に「シオニズムの解剖」(人文書院)、「ディアスポラから世界を読む」(明石書店)、「残余の声を聴く 沖縄・韓国・パレスチナ」(明石書店)、「徐京植 回想と対話」(高文研)。共訳書にジョナサン・ボヤーリン/ダニエル・ボヤーリン「ディアスポラのカ」(平凡社)、イラン・パペ「パレスチナの民族浄化」(法政大学出版局)、ハミッド・ダバシ「ポスト・オリエンタリズム」(作品社)。監訳書にエラ・ショハット、ロバート・スタム「支配と抵抗の映像文化」(法政大学出版局)。